

3 . 研究系及び研究施設の現状

3-1 論文発表状況

3-1-1 論文の発表状況

分子研では毎年 Annual Review (英文) を発刊し , これに発表した全ての学術論文のリストを記載している。

論文の発表状況

編集対象期間	ANNUAL REVIEW	原著論文の数	総説等の数
1986.9. ~ 1987.8.	1987	287	42
1987.9. ~ 1988.8.	1988	247	39
1988.9. ~ 1989.8.	1989	281	60
1989.9. ~ 1990.8.	1990	320	60
1990.9. ~ 1991.8.	1991	260	23
1991.9. ~ 1992.8.	1992	303	41
1992.9. ~ 1993.8.	1993	298	41
1993.9. ~ 1994.8.	1994	211	26
1994.9. ~ 1995.8.	1995	293	23
1995.9. ~ 1996.8.	1996	332	40
1996.9. ~ 1997.8.	1997	403	41
1997.9. ~ 1998.8.	1998	402	44
1998.9. ~ 1999.8.	1999	401	47
1999.9. ~ 2000.8.	2000	337	30
2000.9. ~ 2001.8.	2001	405	65
2001.9. ~ 2002.8.	2002	489	59
2002.9. ~ 2003.8.	2003	530	45
2003.9. ~ 2004.8.	2004	435	40
2004.9. ~ 2005.8.	2005	402	44
2005.9. ~ 2006.8.	2006	340	21

3-1-2 論文の引用状況

論文の引用数については、米国トムソンサイエンティフィック社（通称 ISI）の引用動向データに基づく調査結果が毎年公開されている。ただし、化学分野の場合、総被引用数で国内10位までしか公表されないため、分子科学研究所のように小さな所帯では総被引用数で10位に入り切らないことがある（15位までのクラスには入っていると思われる）。一方、国立情報学研究所の根岸正光教授は同じ ISI 社のデータから化学分野で論文総数で国内30位以内という基準（今回は案分論文数基準に変更）で調査対象とする組織を選んだ上で、研究者の数に依存しない論文1報あたりの平均被引用数をもとに分野の違いが出ないような統計処理を行って引用度指数というものを算出している（文献1に定義がある）。

ここでは表1に文献2に公表されている最新のデータを示す。なお、最新版ではこれまでのように単純な引用度指数¹⁾ではなく、著者の所属数で案分することで一つの論文を二重、三重に数えないように操作した引用度数（ここでは案分引用度数と呼んで以前のもとの区別する）が報告されている。分子科学研究所のような大学共同利用機関では大学の研究者との共同研究が多く、著者所属数で案分されると論文数などの数値が低めに出る傾向があると思われる。なお、今回から岡崎国立共同研究機構単位ではなく分子科学研究所単位で集計されるようになった。²⁾

参考文献

- 1) 根岸正光,「大学ランキング 2003」,朝日新聞社, pp. 134-141 (2002).
- 2) 根岸正光,「大学ランキング 2007」,朝日新聞社, pp. 222-229 (2006).

表1 日本の大学等の分野別論文案分引用度指数
分野：化学（2000—2004²⁾）

順位	大学等	案分論文数	案分引用度指数
1	東京大学	2553.0	126.0
2	首都大学東京	360.9	124.9
3	京都大学	3047.8	122.6
	名古屋大学	1249.1	122.6
5	分子科学研究所	437.3	120.8
6	千葉大学	673.8	120.6
7	東北大学	2163.7	118.1
8	大阪市立大学	472.9	116.9
9	北海道大学	1458.0	116.6
10	大阪大学	2465.4	115.5
11	九州大学	1574.8	112.9
12	東京理科大学	774.9	112.5
13	東京工業大学	2494.6	107.1
14	慶應義塾大学	628.0	106.5
15	筑波大学	610.1	106.4